

五感をはたらかせた絵本の読み聞かせに関する一考察

著者	今 由佳里, 尾辻 菜摘子
雑誌名	鹿児島大学教育学部教育実践研究紀要
巻	29
ページ	19-28
発行年	2020
URL	http://hdl.handle.net/10232/00030932

五感をはたらかせた絵本の読み聞かせに関する一考察

今 由佳里 [鹿児島大学教育学系 (音楽教育)]

尾辻菜摘子 [鹿児島大学大学院教育学研究科]

A study of reading picture books aloud to develop five senses

KON Yukari and OTSUJI Natsuko

キーワード：五感、絵本、読み聞かせ、幼稚園、アニメーション

はじめに

スペインに端を発する読書のアニメーションは、子どもたちへの読み聞かせメソッドとして欧州において広く知られている。筆者は数年前、フランスの図書館においてアニメーションを実践するドミニク・アラミシエル (Dominique Alamichel) のワークショップを経験する機会を得た。彼女のアニメーションでは、ニュートンの万有引力の法則発見をテーマとする読み聞かせが行われていた。最初の導入では、実際にリンゴを持って質問を投げかけ、万有引力発見の着想を得た話を交えながら、ニュートンの読み聞かせへと移行した。子ども達の日常生活に身近な対象を用いて考えさせることにより、興味を持たせつつスムーズに絵本の読み聞かせの活動に進めていた。アニメーションでは、様々な角度から絵本へアプローチし、多くの子どもたちを物語の世界へと惹きつけている。それは、子どもの五感をはたらかせながら絵本を読み聞かせているところに特徴があるためではないかと考えられる。日本の絵本の読み聞かせに馴染んでいると、アニメーションを取り入れた絵本の読み聞かせは、子ども参加型の活動が多く、賑やかな雰囲気という印象を持つかもしれない。それは、アラミシエルが言う「アニメーションは出会いと交流の場」という社会的役割を担うことに起因するからであろう。本論では、日本の絵本の読み聞かせの活動について、五感を視点にして分析・考察し、その効果について検討したい。

1. 日本における絵本の読み聞かせ

「読み聞かせる」とは「文字に書かれた文章を読み上げて、ある人に聞かせる」ことであり¹⁾、教育現場や図書館等では「読み聞かせ」と称して行われている。「いつでも、どこでも、だれでも行うことができるという簡便さやその教育的効果から、多様な場所で幅広い年代の聞き手を対象に実践されている」²⁾。中でも絵本の読み聞かせにおいては、大人から子ども(達)へ向けて行われることが一般的である。絵本の読み聞かせには様々な効果があるが、親と子との読み聞かせであれば、それは信頼関係を築く時間となり、保育者と園児の関係であれば、絵本の世界観を共有し、学級全員で楽しむ時間となり得る。横山は「保育における集団での絵本の読み聞かせの意義として、『共有

体験』をもつことが挙げられている」³⁾ と言い、寺崎は「絵本の読み聞かせは、子どもと大人とのあいだに起こる快いコミュニケーションになる」「発話以前の状態にある乳幼児と母親とのコミュニケーションに、絵本を読むことは欠かせない」⁴⁾ と述べている。すなわち、絵本の読み聞かせを通して読み手と聞き手のみならず、その場を共有した子ども達同士の人間関係の深まりが期待できるのではないだろうか。教育現場において信頼関係の構築は、教育の効果にも影響を及ぼす重要な事項である。

一方、実際の保育を参観していると、絵本を見て心を動かされ、思わずつぶやいた子どもの言葉を「しーっ」と遮る場面を目にする機会があった。日本の保育現場においては一般的に、絵本の読み聞かせの時間は「集中して静かに聞くもの」という考えのもと保育が実践されている理由から、保育者のこのような関わりがうまれたのだろう。絵本の読み聞かせにおいて、集中力を養うというねらいを重視して行う保育者もいる(横山、2008)。その背景には、日本において絵本は作者のこだわりをもってつくられているので、忠実に文字を読み、大袈裟な動きやアドリブは加えないで読み聞かせると認識されているためと考える。したがって、絵本の世界観を壊さぬよう忠実に読まなければならないという思いが、保育者の行動をそのようにさせたのではないかと推察される。関連する研究として松村ら(2015)は、演じて読むことに否定的な意見があることを明らかにした上で、読み聞かせ時の演じ分けは、大きく物語の理解には影響しないものの、心情理解を阻害したり、登場人物に対する印象に影響がある可能性を示唆している。

絵本の読み聞かせは、日本の幼稚園において毎日のように行われている日常化した活動である。「絵本を読むと頭が良くなる」などといった漠然としたイメージは一般にも広く浸透し、子育てにおいても積極的に取り入れられており、読み聞かせと知能発達についての本も多く出版されている。また、自治体が0歳児健診などの機会に、絵本をセットでプレゼントする「ブックスタート」事業は、全国の半数以上の自治体で行われている⁵⁾。

2. 幼稚園教育要領における絵本の読み聞かせの位置づけ

幼稚園における絵本の読み聞かせについて、幼稚園教育要領(平成29年告示)ではどのように位置づけられ、いかなる教育的効果をねらっているのだろうか。幼稚園教育要領の中に「絵本」の文言が出てくる箇所について、以下に記載する(下線は筆者のひとり尾辻が加筆)。

幼稚園教育要領 第1章 第2

幼稚園教育において育みたい資質・能力及び「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」

3 (9) 言葉による伝え合い

先生や友達と心を通わせる中で、絵本や物語などに親しみながら、豊かな言葉や表現を身につけ、経験したことや考えたことなどを言葉で伝えたり、相手の話を注意して聞いたりし、言葉による伝え合いを楽しむようになる。

幼稚園教育要領 第2章 ねらい及び内容 言葉

1 ねらい（3）日常生活に必要な言葉が分かるようになるとともに、絵本や物語などに親しみ、言葉に対する感覚を豊かにし、先生や友達と心を通わせる。

2 内容（9）絵本や物語などに親しみ、興味をもって聞き、想像する楽しさを味わう。

3 内容の取扱い（3）絵本や物語などで、その内容と自分の経験とを結び付けたり、想像を巡らせたりするなど、楽しみを十分に味わうことによって、次第に豊かなイメージをもち、言葉に対する感覚が養われるようにすること。

（4）幼児が生活の中で、言葉の響きやリズム、新しい言葉や表現などに触れ、これらを使う楽しさを味わえるようにすること。その際、絵本や物語に親しんだり、言葉遊びなどをしたりすることを通して、言葉が豊かになるようにすること。

幼稚園教育要領では、絵本を介して「想像する楽しさを味わうこと」「豊かなイメージを形成すること」「豊かな言葉や表現を身に付けること」をねらいとして、言葉に対する感覚を豊かに育み、日常生活に活かすことができるための保育実践が期待されていると理解できる。

幼児の生活や学びは、未分化なものである。特に幼児教育では「言葉」「健康」「人間関係」「環境」「表現」の各領域が、相互に影響し合って総合的に発達していく。つまり、絵本は単に言葉を獲得するだけではなく、絵本を手掛かりにして各領域の発達も促すことが真に目指されている事なのではないだろうか。

子どもたちは絵本を見ることによって、お話の世界に入り込み、想像を巡らせて楽しむことができる。また絵本には「友達との関わり」「冒険」「自然」「食べ物」「民話」等様々な題材のものがあり、絵本をきっかけとしてそれらに心をはたらかせ、自分なりの思いをもち、感性を育てるきっかけとなり得る。単に「言葉の獲得」だけではなく、幼児の生活や学びと関連した題材を選び読み聞かせを行うことで、ねらいに沿った学びをより充実させることができるものと考えられる。具体的な実践例を、以下に述べる。

3. 絵本を用いた保育実践の概要と実践記録

本項では、大阪府高槻市立富田幼稚園において尾辻が実践した『ぼく、あぶらぜみ』『かいじゅうたちのいるところ』『わたしのワンピース』の読み聞かせから、五感に視点をおき、保育実践の分析・考察を行う。

（1）『ぼく、あぶらぜみ』から命の尊さを感じ、生命尊重の心を養う

①実践の概要

【対象者】大阪府高槻市立富田幼稚園 そら組（異年齢（4～5歳）児学級）

【園児数】20名（年長児10名うち男子5名、女子5名 年中児10名うち男子5名、女子5名）

【保育日時】2017年7月20日（木）11：00～11：30

【保育者】尾辻 菜摘子

②子どもの実態と保育活動

夏になると、幼稚園の桜の木からはたくさんのセミの声が響き出す。子ども達は自分の背丈より長い虫取り網を手に木々を見上げ、目を輝かせてセミ捕りに夢中になる。園では虫かごのセミは逃がしてから保育室に戻るように指導していたが、捕まえた嬉しさから、保育者が説得しても頑なに逃がさず虫かごに入れたままの子どもがいた。そのまま降園して数匹のセミがひとつの虫かごの中で息絶えてしまった翌日の実践である。

セミは土の中で数年を過ごし、地上で「セミ」として生きられるのは数日間である。そのような儂い一生を知り、命の大切さや尊さを感じてほしいと考えた。この絵本を選んだのは、先に述べたようなセミの一生を保育者から一方的に説明するよりもより深く命の尊さを実感し、自身の行動を変容させる深い学びを実現できるのではないかと考えたためである。

③絵本の概要：『ぼく、あぶらぜみ』（作：得田之久、絵：たかはしきよし）全28頁

同者作『ぼく、だんごむし』に続く作品であり、題名のとおりアブラゼミの一生を描いた絵本である。誕生から死までの過程を忠実に伝える科学的な背景をもった内容であるが、図鑑を見るのとは違い、貼り絵があたたかく、優しい口調で語られるセミの一生に、目も心も深く引き込まれる作品である。

④『ぼく、あぶらぜみ』の実践記録と活動分析

【表1：『ぼく、あぶらぜみ』の実践記録】

ねらい ・セミの一生について知り、命の不思議さや尊さを感じ、生命尊重の心を養う。		
活動	保育者の援助	子どもたちの様子
1 セミ捕りをして遊んだことを思い出す	今日一日の中で遊んだことや楽しかったことを問かけ、一人ずつ指名する。	「友達とままごとをした」「鬼ごっこをした」「セミ捕りをした」等、思い思いに発表する。
2 『ぼく、あぶらぜみ』を見る	「何年間、土の中にいたと思う？」等、絵本に沿って所々で子ども達と対話をしながら読み聞かせを行う。	普段の生活経験から、セミへの興味は高く、集中し子ども達なりに考えながら聞いている。
3 振り返りをする	「だから、捕まえたセミは逃がしてあげようね」と行為に着目してまとめるのではなく、「セミになるために長い間一生懸命頑張ってきたんだね」「お空を飛んだり木にとまって鳴いたりできて嬉しいだろうね」等、幼稚園に生きているセミを主体とした言葉をかける。それにより子ども達が自ら考えて行動できるように援助した。	絵本の余韻に浸りながら、保育者の言葉を聞いている様子である。

読み聞かせの後、セミ捕りを楽しんだ子ども達は、遊び終わるとセミを外へ逃がしてから虫かごを片づけた。また「お母さんに見せたい」という子どもとは相談し、迎えの際に保護者に見せた後に、保護者や保育者と共に木に逃がしてから降園するようになった。

この実践は、幼稚園教育要領解説の次の部分に当てはまる。

幼稚園教育要領解説 第1章 総説 第2節 幼稚園教育において育みたい資質・能力及び「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」3 (7) 自然との関わり・生命尊重より

「幼児が身近な自然や偶然出会った自然の変化を遊びに取り入れたり、皆で集まったときに教師が

それらについて話題として取り上げ、(略)次第に自然への愛情や畏敬の念をもつようになっていく」
「動植物への親しみや愛着といった幼児の心の動きを見つめ、ときには関わり方の間違いや失敗を乗り越えながら、命あるものをいたわり大切にす気持ちをもつ育むように援助することが重要である」

子ども達は普段から幼稚園の環境の中で、存分に五感を使って遊んでいる。セミの様子や動き(視覚)、鳴き声などセミが発する音(聴覚)、捕まえたときの感触(触覚)、特徴的な匂いはないもののセミや木、その場の空気(嗅覚)などである。今回の実践では、絵本をきっかけに子ども一人ひとりがそれらを改めて感じ直すことができた。絵本の中の「ジリジリジリ」という鳴き声(聴覚)など、自然の音や様々な感覚を意識させることを可能にしていることが、子ども達にとってセミの一生についてより現実味をもたせ、生命尊重の心にもつながり、行動の変化にはたらきかけたと考えられる。

(2)『かいじゅうたちのいるところ』から想像を膨らませ、表現活動に活かす

①実践の概要

【対象者】大阪府高槻市立富田幼稚園 年長児(にじ組・そら組)

【園児数】20名(男子10名、女子10名)

【保育日時】2017年10月17日(火)10:30~11:30

【指導者】尾辻 菜摘子

②子どもの実態と保育活動

芸術の秋、園では保護者に絵画などの作品を参観してもらう「生活展」という行事が行われていた。この時期は、園での遊びも描いたりつくったりすることを意識して行う時期である。本実践における描画活動では、題材『かいじゅうたちのいるところ』の絵本を選び、クレパスと個人絵の具を使って怪獣を描いた。子ども達は4月から様々な画材や題材で描画表現活動を楽しんできているが、中には絵本の登場人物等を「お手本通り描く」ことを重視する子どもや、描き方が分からずイメージしたものを「うまく書けない」と自信がない子どももいた。そこで今回の描画活動では、全ての子どもが自由な表現を楽しみ、満足感を得てほしいと考え、この絵本を題材に取り組んだ。

③絵本の概要：『かいじゅうたちのいるところ』(作：モーリス・センダック やく：じんぐうてるお)全40頁

本作品は、風景や怪獣たちが繊細なタッチで描かれており、大人が眺めていても飽きない魅力がある。また作品に登場する3匹の「かいじゅう」は角、毛並み、しっぽなど一般的な怪獣をイメージできる特徴は持っているが、それぞれ色や形が違い、決まった怪獣の姿形を示すものではない。そのような「かいじゅう」たちが踊る場面には、非常な迫力が感じられる。現実には起こり得ない物語は、子ども達が夢を膨らませて楽しい気持ちで味わうことができる絵本である。また、絵本の中には主人公から見た「かいじゅう」の恐ろしさを表わすフレーズが数頁にわたり繰り返され、「か

いじゅう」を描く際のポイントが幼児にも気づきやすい。

④『かいじゅうたちのいるところ』の実践記録と活動分析

【表2：『かいじゅうたちのいるところ』の実践記録】

ねらい ・自由に想像を膨らませながら描くことを楽しむ。		
活動	保育者の援助	子どもたちの様子
1 絵本を見る	普段学級で絵本を見るときと同じ隊形で読み聞かせを行い、落ち着いて見られるようにする。	絵本を出した途端「え～かいじゅう、難しそう」といった言葉が飛び出す。
2 保育者が例を描く	絵本の中で繰り返される「すごいはをがちがちならして…」という、フレーズを口にしながら描き、「かいじゅう」を描くポイントがわかるようにする。	「私はしっぽを描こう」など、自分なりの「かいじゅう」のイメージを次第に明確にしている。
3 「かいじゅう」を描く	難しい子どもには、少しの間絵本を見せながら「かいじゅう」の特徴を話し、具体的なイメージを持てるよう援助する。	3匹の「かいじゅう」からヒントを得て、自由に想像を膨らませながら思いおもいの「かいじゅう」を描いている。
4 順次片づけを行う	一人一人の作品の良さに寄り添い、満足感をもって活動を終わられるような言葉かけをする。	冒頭で「難しそう」と言った子どもは、書き終わった後に保育者の側に来て「難しそうって思ったけど描けた」と何度も繰り返し、自信・満足感に満ちている。

子ども一人ひとりが自由に想像して表現を楽しみ「かいじゅう」の姿や動き、色づかいなどそれぞれの個性が光る作品が仕上がった（【写真1～6】参照）。



【写真1：幼児A (女) 怪獣と主人公マックス】



【写真2：幼児B (女) 色々な怪獣と主人公】



【写真3：幼児C (女) 怪獣と主人公】



【写真4：幼児D (女) 色々な怪獣と主人公】



【写真5：幼児E (男) 怪獣と主人公】



【写真6：幼児F (男) 森の中で出会った怪獣達】

絵本の中の「すごいこえでうおーっとほえて すごいはをがちがちならして すごいめだまをぎよろぎよろさせて すごいつめをむきだした」というフレーズは、主人公から見た怪獣の恐ろしさを表わしている。例えば、「うおーっ」とすごい声で吠える（聴覚）怪獣のイメージは子どもたちの想像を豊かにし、「がちがち」「ぎよろぎよろ」という擬音（聴覚）が「かいじゅう」の恐ろしい姿（視覚）を印象づけている。「かいじゅう」の姿と子どもの心情が一致することで、表現活動はより

豊かなものになる。また、繰り返される言葉のリズムは思わず自らも繰り返して言いたくなるような楽しさがある。

これら絵と文字のきっかけから「つめは固そうだ」「フワフワのしっぽのかいじゅうにしよう」「ツノはツルツルしている」など触覚も同時にイメージされる。冒頭で「難しそう」と言った子どもは、書き終わった後に教師の側に来て「難しそうって思ったけど描けた」と何度も繰り返し、自信と満足感に満ちていた。本実践では、平面の絵本からあらゆる感覚を呼び起こし、それを表現活動の一助にすることができたのではないかと考えられる。

(3) 『わたしのワンピース』から絵本の世界観を味わい、自由に表現することを楽しむ

①実践の概要

【対象者】高槻市立富田幼稚園 にじ組（異年齢児学級）

【園児数】20名（年長児12名うち男子7名、女子5名、年中児8名うち男子3名、女子5名）

【保育日時】2018年4月26日（木）～2018年5月18日（金）

【指導者】尾辻菜摘子

②子どもの実態と保育活動

年度当初、特に家庭から初めて幼稚園に来た子どもには、安心して遊び、幼稚園に慣れてほしいという思いから、入園前アンケートを基に家庭でも行っていた遊びを多く用意している。その中の一つがぬりえである。入園・進級当初は小さい面積のぬりえなど簡単なものを用意していたが、幼児が幼稚園の環境に慣れてくるとともに、子どもが想像し、自分なりに工夫できる余地のある題材を用意しようと考え、本実践を行った。

③絵本の概要：『わたしのワンピース』（えとぶん：にしまきかやこ）全44頁

次々に現れる新しいものとの出会い、そして「わたしのワンピース」に起こる不思議な出来事が描かれている絵本。大きく場面が飛躍する展開により、ページをめくる楽しさにワクワクする作品である。また、少ない文章で構成されているため、子ども達なりに自由に想像して楽しむ余地もある。ページには主人公のうさぎと、出会うもののみが大きく描かれており、繰り返しのストーリーと共に低年齢の子どもにも理解し親しみやすい絵本である。

④『わたしのワンピース』の実践記録と活動分析

【表3：『わたしのワンピース』の実践記録】

ねらい ・絵本の世界から、想像を膨らませ自由に表現することを楽しむ		
活動	保育者の援助	子どもたちの様子
1 「わたしのワンピース」を見る（降園前学級活動）	全員が絵本を見やすい位置に座っているか確認し、落ち着いた雰囲気をつくってから読み聞かせを行う。	次々に模様が変わるワンピースに心を弾ませ、次の展開を楽しみにしながら見ている。
2 （翌日）自由遊びにて『わたしのワンピース』のぬりえをする	・すぐに遊び出せるよう、机の上にぬり絵を並べておく。また、絵本を開いて立てておき、自由に見られるように用意する。 ・子どものイメージを聞き取り、ぬりえの空いたスペースに書きこむ。	・個人のクレパスを持ってきてぬりえをする。 ・前日に読んだ絵本ということもあり、興味を示す子どもが複数いる。 ・絵本を見て楽しむ子、気に入った場面を再現して描く子、自由に想像してワンピースの模様を描く子がいる。

		<ul style="list-style-type: none"> ・多くの子どもは何度も繰り返して描き「ハートの道で転んで、(ワンピースに)ハートがくっついちゃったの」等と保育者に話しかけている。
3	できた作品を飾る	自由に飾れるように、壁にクリップを吊るしておく。
		<ul style="list-style-type: none"> ・飾られているぬりえを眺めながら「私のはこれとこれ」「これ誰の?」「かわいい」と、自分や友達作品に親しみをもつ。 ・素敵だと思った友達の真似をして描く子どももいる。

前日に絵本を読んだ効果もあり、これまで描画活動に取り組んでいなかった子どもも興味をもち遊ぶ姿があった。絵本は空想の世界の話であり、どのような場面を想像しても間違いがない題材であるため、子どもたちは伸び伸びと楽しんで活動しているように観察された。読み聞かせ場面において、子ども達は絵本のページをめくる度に、目に飛び込むワンピースの模様に刺激を受け(視覚)、自身の創作活動への発想を得ていたことが推測される。

本文の「ミシンカタカタ ミシンカタカタ」「ラララン ロロロン ランロンロン」などという心地よいリズムと響きは、幼稚園教育要領解説の以下の部分に示されているように、子ども達が言葉の楽しさや美しさに気付き、言葉の感覚を豊かにしていくきっかけにもなっている。

幼稚園教育要領第2章 ねらい及び内容 第2節 4 言葉の獲得に関する領域「言葉」

[内容の取扱い] (4)

幼児が生活の中で、言葉の響きやリズム、新しい言葉や表現などに触れ、これらを使う楽しさを味わえるようにすること。その際、絵本や物語に親しんだり、言葉遊びなどをしたりすることを通して、言葉が豊かになるようにすること。

子どもの傍らで一緒に遊んでいた尾辻は、それをねらって「ラララン ロロロン ランロンロン」と口ずさんでから「ハート模様のワンピース、私に似合うかしら」と、子どもの作品に触れた。その後、作品ができあがると子ども自身が保育者尾辻の発した言を聴き取り(聴覚)、真似て楽しそうに口ずさむ姿が見られた。

この絵本の作者西巻茅子は、少ない文章で構成されている理由を「子どもの自然な感想や言葉が『うさぎのつぶやきになればいいな』という思いから」⁵⁾と言っている。また「麦畑のページでは、絵本に鼻をつけて『いい匂い』と言った子も、『絵本って匂いまでするんですね』と言った保護者もいたという」⁵⁾。絵を見る(視覚)ことにより「自然な感想や言葉」が生まれ、自分の生活経験からその匂いまで想起させる(嗅覚)ほど、感性が刺激されているのである。

4. 五感をはたらかせた絵本の読み聞かせ

尾辻は保育現場において、幼児教育は「健康」「人間関係」「環境」「言葉」「表現」の各領域が相互作用し合って総合的に発達していくと考え保育を実践してきた。例えば、音楽に触れ楽しんでほ

しいというねらいをもって保育を行うとき、深い学びの実現のためには直接に音楽活動を勧めるだけのアプローチでは不十分である。それは、音楽活動を楽しむに至るまでの子どもたちの心と体には、多くのプロセスが存在するからである。その時期が入園当初であれば、子どもたちは新しい環境に戸惑いを感じ、期待の反面緊張や不安が大きいことが予想される。そのため、最初にその緊張や不安を解消することが必要となる。家庭で経験してきた遊びや簡単にできる遊びを取り入れることは、子どもたちが安心し、情緒が安定することにつながり、そこではじめて園内の様々な環境に興味を持ち意欲的に遊ぶ姿が生まれる。情緒の安定には保育者との信頼関係を結ぶことも重要である。そうして様々な遊びに興味を持ち始めたとしても、興味の対象は子どもによって様々である。聞こえてくる音楽や楽器の音色に興味を持って遊び始める子どももいれば、音楽活動を想定した環境に全く興味を示さない子どももいる。その場合、関連した遊びの環境を用意することも一つの方法となる。用意した音楽にネコなどの動物が出てくる場合、ネコのぬりえを用意しておけば、ぬりえに興味を持つ子どもは自然にぬりえで遊び始める。完成したお面を身につけ、ネコになりきった子どもは、それをきっかけにネコの出る音楽表現も楽しんでいる姿が見られるようになる。また、その逆の場合も往々にして目にする光景である。

また、様々な環境を用いてイメージを膨らませることが音楽表現の意欲・きっかけになり、遊びをより充実させられると考える。楽器を自由に鳴らせる環境であれば、どのように鳴らすか感性をはたらかせて遊ぶことが重要である。例えば絵本を読んで気に入った言葉のリズムがあり、言葉で繰り返すのに合わせて楽器を鳴らしてリズムを楽しむことが予想できる。ネコになり切って音楽表現を楽しむ場合は、ネコの可愛い様子をイメージして鳴らしたり、昼寝をしているネコを想像して音を鳴らしたりすることで、音の大きさや長さ、リズムなどの表現を工夫するかもしれない。

上記している3つの保育実践における絵本の扱いは、子どもの想像力を豊かにし、ねらった領域の発達を促すのに効果的だったのではないかと考える。『ぼく、あぶらぜみ』の実践では、普段からセミへの触覚、聴覚、嗅覚を実感していたことで絵本の内容に深く入り込むことを可能にし、感情に訴えかけることができた。『かいじゅうたちのいるところ』では、描画表現をするために、形を捉えて描く視覚だけでなく、怪獣の鳴き声（聴覚）や身体の特徴（視覚、触覚）を想起させることで豊かな描画表現を実現できた。『わたしのワンピース』では、心地よいリズム（聴覚）を楽しんだり、様々な模様（視覚）から想像を膨らませて表現をしていた。

しかしこのように五感に着目して振り返ってみると、味覚、嗅覚を絵本と結び付けて直接扱うことがあまり多くないことに気づかされる。尾辻が幼稚園へ勤務中、香り付きの絵本に出あったことがある。いちごの図鑑で、小さいいちごの写真を擦ると、いちごの香りがするページがあった。子ども達は「いい匂い」「美味しそう」と、繰り返し香りを楽しんでいた。当然、最も大切なことは本物の香りに触れて五感が刺激されることであり、全てを再現して作ってあるものに頼るのは望ましい教育方法とはいえない。しかし、身近に実物が無く触れられない場合などは、このような仕掛けを用いて体験したり、実物や本の内容に興味をもたせるきっかけとすることも効果的なのではないだろうか。

おわりに

本論では、日本の保育実践における絵本の読み聞かせについて、五感を視点にして分析・考察を行った。乳幼児期は五感の発達が著しく、子どもの成長にとって重要な時期と捉えられている。このような時期を利用して、五感からのアプローチによる絵本の読み聞かせを行うことは、子どもの感性を育む上で有効にはたらきかけ、また知的発達についても効果的に作用することとなるのではなかろうかと本研究を通して考察された。

【註】

- 1) 日本国語大辞典 第二版 第十三巻、株式会社小学館、2002、p.206
- 2) 宮澤優弥「読み手は学校における読み聞かせ活動をどう意義づけているか」『読書科学』第58巻第4号、2017、pp.212-226
- 3) 横山真貴子、水野千具沙「保育における集団に対する絵本の読み聞かせの意義 - 5歳児クラスの読み聞かせ場面の観察から -」『教育実践総合センター研究紀要』第17巻、2008、pp.41-51
- 4) 寺崎恵子、「絵本におけるコミュニケーション」『聖学院大学論議』第26巻第2号、2014、pp.247-262
- 5) NPO ブックスタート Bookstart Japan、“実施自治体一覧”、2019
<http://www.bookstart.or.jp/about/ichiran.php> (2019.8.28 アクセス)
- 6) 佐藤英和『絵本に魅せられて』こぐま社、2016

【参考文献】

- ジュヌヴィエーヴ・プジョル他著、岩橋恵子監訳『アニメトゥール フランスの社会教育・生涯学習の担い手たち』明石書店、2007
- 庄野音比古『ようこそ、絵本館へ』文藝春秋、2011
- 種村エイ子・子どもの本かごしま『ようこそ、読書のアニメーションへ』南方新社、2018
- 松村 敦・森 円花・宇陀則彦「絵本の読み聞かせ時の演じ分けが子どもの物語理解と物語の印象に与える影響」『日本教育工学会論文誌』39、2015、pp.125-128
- 『幼稚園教育要領解説』株式会社フレーベル館、2018
- 『保育所保育指針解説』株式会社フレーベル館、2018
- 『認定こども園教育・保育要領解説』株式会社フレーベル館、2018
- Dominique Alamichel, *La bibliothécaire jeunesse : une intervenante culturelle, 60 animations pour les enfants de 18 mois à 11 ans*, Éditions du Cercle de la librairie, 2006

【附記】本論文は、前川財団による研究助成を受けて実施した研究成果の一部である。